

戦争と人間

18

裁かれる魂 第六部

五味川純平



戦争と人間 18

1982年12月15日 第1版第1刷発行

1982年12月31日 第1版第2刷発行

著 者 五味 川 純 平

© 1982 年

発 行 者 菊 地 喜 三 次

印 刷 所 曉印刷株式会社

製 本 所 熊 倉 製 本 所

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電 話 03 (291) 3 1 3 1 ~ 5 番

振 替 東 京 9 - 8 4 1 6 0 番

郵便番号 101

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 941

戦 争 と 人 間

18

戴かれる魂

第 六 部

五味川純平 著

戦争
と
人間

裁
か
れ
る
魂

第六部

台湾沖航空戦の戦果の誤報が、たとえば伍代英介のような人物を驚喜させたり、あとになって落胆させたりした分には、大したことはなかったが、つづいて起こったフィリピン沖海戦に対処する海軍の考え方に混乱を生ぜしめたばかりでなく、フィリピンの地上作戦に関してはルソン決戦と決っていたものを俄かにレイテ決戦に転換する契機となったとすれば、「誤報」と言っては済まされない由々しいことであった。

「大戦果」は、実は、日本側の航空兵力にとっては、決定的な大損失なのであった。フィリピンでの決戦を予期して貯えた航空兵力の三分の二を、敵にほとんど打撃を与えることなしに失ってしまったのである。

戦果報告はよほど冷静な観察眼が働いていない限り、常に過大になりがちなものである。空中戦なら、墜落する敵機を重複報告するのはままあることである。雷撃の場合には、自分が投下した魚雷が敵艦に命中爆破したと見えたのが、実は、味方機が自爆炎上したのを見誤っている場合がある。また、混戦のさなか、敵艦の巨砲が発砲して噴いた火焰を、魚雷命中と誤認することもあり得る。台湾沖の戦闘ではT攻撃部隊の薄暮攻撃か夜間攻撃が多かったから、夜闇の海面で自爆機が炎上すると、その後景にある敵艦が燃えているように見えるのを、瞬間的にその真偽を識別するのは確かに困難なことであるにちがいない。それにしても、照明隊はあったはずであるにもかかわらず、吊光弾をもって海面を照らさなかったのは納得がゆかない。いずれにしても、搭乗員の経験不

足（ほとんどが初陣であったこと）と、攻撃隊の編成が臨時の掻き集めであったことに問題があったといえるであらう。

それよりも、失敗の根本原因は、やはり、米軍では既に確立されていて、日本軍ではまだ未発達であったエレクトロニクス指揮システムにある。日本軍のリーダーは、敵を感知はするが、早く知らせて早く対処の行動を起こさせる自動作用が出来ていなかった。米軍は、日本の攻撃隊を探知して、五十哩から二十哩の前方で戦闘機群をもつて邀撃する能力を備えていたのである。

台湾沖航空戦の戦果報告が過大であったことを日本の海軍及び陸軍が確認するまでには、かなりの日時が必要であった。したがって、日本側では、陸海軍とも、米軍は台湾沖で大打撃を蒙ったから、早急に次の大規模な作戦を起こす余力はないはずである、と観測していた。

その矢先、台湾沖航空戦からまだ幾日も経っていない十月十七日、午前七時前、レイテ湾頭のスルアン島見張所から、戦艦二隻、特設空母二隻、駆逐艦六隻が接近中である、と飛電があり、つづいて午前八時、「敵上陸ヲ開始セリ」と報じたあと、見張所からの連絡が絶えた。小さな見張所はほとんど抵抗の余地もなく玉碎したのである。

この日、米軍はフィリピン各地を四五〇機の航空兵力をもつて空襲した。陸海軍は索敵に努めたが、天候に阻まれて索敵効果をあげられなかった、ということになっているらしいが、天候のせいばかりではない。索敵方法が予断に禍されて、誤っていたのである。米軍攻略部隊の輸送船団を索めるにあたって、日本軍側はフィリピン東方海面の索敵するのに、北部に偏して実施した。これも台湾沖航空戦の影響である。大打撃を蒙ったはずの

米海軍はフィリピン東北方海域にしかないという予断があった。したがって、フィリピンの中部以南の東方海面の哨戒飛行は実施していなかったから、敵の輸送船団を発見し得なかったのである。

同じく十月十七日、連合艦隊は「捷一号作戰警戒」を発令した。スルアン見張所からの連絡が絶えてから敵情は全く不明で、索敵も前記のように効果がなく、敵のスルアン攻撃の企図が果してフィリピン中南部への上陸を意味するか否か、「未だ確信に達せず」という状態であったが、捷一号作戰に必要な措置をとったことは、海軍としては妥当であった。

連合艦隊司令部の作戰計画（捷号作戰計画）では、栗田中将率いる第一遊撃部隊（連合艦隊主力）をもって、敵上陸地点に突入し、輸送船団及び護衛艦艇を撃滅する、小沢中将指揮する機動部隊本隊を南下（瀬戸内海から）させ、敵機動部隊を北方へ吸引牽制して、栗田艦隊を存分に働かせる、第二遊撃部隊（志摩艦隊）を海上機動させて栗田艦隊に策応させる、基地航空部隊をフィリピンに集中して総攻撃を実施させる、潜水艦を全力出撃させる、という構想であった。

栗田艦隊（第一遊撃部隊）に対しては、その前日、台湾沖航空戦の「残敵」（まだGFも大勝したという誤判断から脱し切れていなかった）撃滅のために出撃準備を下令してあったが、いまや捷号作戰の予定通り、敵上陸地点へ突入させるべく、速かにボルネオのブルネイ泊地へ進出する命令が出された。

小沢部隊（機動部隊本隊）には、マリアナ海戦、台湾沖航空戦と打ちつづいた消耗で、実戦力のある航空兵力がきわめて少なくなっていたが、訓練未済の第一航空戦隊の飛行機を搭載して、出動準備を急がせた。栗田艦隊の敵上陸地点殴り込みから敵機動部隊を牽制する伴動作戦のためである。

この日から約一週間後、日本の海軍は事実上ほとんど全滅してしまうのである。

十月十八日午前、南方軍總司令官（陸軍・寺内大将）は、富永第四航空軍司令官に対して、レイテ島ドラッグ沖に在ると思われる敵を攻撃するよう命じた。

第四航空軍司令官の命令によって、第二飛行師団は「死力を竭して敵を撃滅する」決意をもってスルアン島方面に全力攻撃を、第三十戦闘飛行集団は中部フィリピンに進出して攻撃準備をすることになったが、両兵团とも天候不良のため出撃を中止した。海軍機もこの日は出撃しなかった。

掛声は勇ましかったが、飛ばなかったのである。

ところが、米軍側から艦上機がフィリピンの各飛行場、港灣設備や在泊船舶に対して反復猛攻を加えてきた。マニラ方面は終日雨が降り、夕方から暴風雨模様となったが、米機の攻撃は延九七五機以上を算え、襲撃は執拗をきわめた。

米機は大挙反復来襲し、日本軍機は飛ばない。この差は何に因るのか。彼我の技倆の優劣の差か。機材の優劣の差か。それとも戦意の強弱の差であるか。

現地の日本軍地上部隊も、敵の来襲に関して、また切迫感を持っていなかった。セブ島に新たに設けられた第三十五軍は、この十八日、レイテ島に在る第十六師団（垣兵団）から、敵の艦艇が多数レイテ湾内に進入しているが、師団の判断としては、敵が上陸進攻のために湾内進入したものか、暴風避難のために入ったものか、それとも、台湾沖の戦闘で損傷した艦艇が遁入したものか、不明であるという報告を受けた。ちょっと信じ難いほどにのんびりした話だが、鈴木宗作第三十五軍司令官も、敵艦艇のレイテ湾進入は伴動であろう、真面目な上陸作戦のためとは考えられない、と判断したし、第三十五軍の上に位置する第十四方面軍（軍司令官・山下奉文大将）

でも、敵の来攻企図に対して否定的な空氣が濃厚であった。

信じられないようなことだが、こうした空氣を醸成したのは、九月のダバオ上陸誤報事件や、つい数日前の台湾沖の「大戦果」の誤報が作用していたことは間違いないであろう。

第十四方面軍では、しかし、情況を精密分析してみても、敵の水上兵力や航空攻撃から考えると、台湾沖の「大戦果」が疑わしくなりはじめていた。

同じく十月十八日、海軍では、第一遊撃隊（栗田艦隊・連合艦隊主力）が午前一時既にリンガ泊地を出撃していた。ボルネオのブルネイ泊地到着は二十日午前十時の予定である。ブルネイでの補給完了は二十二日午前中となるから、最短距離を走航してもフィリピン東方海面に進出するのは二十四日夕刻となる計算であった。

機動部隊本隊（小沢艦隊）は瀬戸内海で出撃準備を急いだが、母艦に飛行機を搭載するのに三日間を必要とするから、出撃は二十日午後となる予定であった。

第二遊撃部隊（志摩艦隊）は十七日奄美大島に入泊し、補給を済ませて十八日午前五時三十分馬公に向けて出発した。同地着は二十日午前となるので、栗田艦隊に策応してレイテ殴り込みをかけるのは時間にずれを生じそうであった。

潜水艦部隊は十八日から二十三日までの間に豊後水道を南下するもの十隻、したがって予想戦域付近の海面にある日本潜水艦は十四隻となる予定であった。計画では、これを三群に分ち、四隻を甲部隊として避退中の敵機動部隊を攻撃する（まだ台湾沖で敵が敗北して避退中であると考えている）、八隻をもって乙部隊とし、レイテ湾口に散開配備させる、残りの二隻を丙部隊とするが、これの出撃は遅れて二十三日ごろになる見込みであった。基地航空部隊は台湾沖航空戦で激滅し、態勢が混乱しているので整備整頓を急がねばならなかったが、航空兵

力としては計算上はまだかなりの数があった。フィリピンにある基地航空兵力は約五〇、台湾に実働機二四〇、内地から進出させ得るＴ攻撃部隊約一〇〇、第二航空艦隊約一七〇、以上で約五六〇機、小沢艦隊の空母搭載機約一二〇、陸軍航空機四〇〇乃至五〇〇を併せると、一〇〇〇機を期待出来ると、海軍部はこの時点で計算していた。

したがって、大本営海軍部では栗田艦隊をルソン海峡を迂回して東進させれば、米機動部隊がこれを発見して、ルソン海峡へ北上し、栗田艦隊を襲撃するにちがいない、その時機を狙って我が基地航空部隊がフィリピンから、あるいは台湾から、米空母群に猛攻を加え、水上艦艇と航空兵力で米艦隊に決戦を強いようという、作戰構想を立てていた。

東京日吉台に在る連合艦隊司令部では、しかし、軍令部とは別の作戰案を固めていた。栗田艦隊（第一遊撃部隊）をサンベルナルジノ海峡からフィリピン東方海面に進出させて、米軍の上陸地点に突入させ、敵の艦船群を撃滅する、という考え方である。海軍部は、栗田艦隊がフィリピン諸島間の海峡を通過する際に米航空機に襲われる危険が大きいことを懸念して、ルソン海峡迂回を主張したが、連合艦隊では、敵がそれほど大勢力の航空兵力を指向し得る状況にはないとして、海軍部案に同調しなかった。台湾沖の戦果をまだ信じていたのだとしか考へられない。

十八日、現地海軍部隊は、敵の無線電話を傍受した。「一五三〇、タクロバン南方ドラッグ（サンホセ間に上陸を開始せよ）」というのである。南西方面艦隊は、軍令部に対して、敵がレイテ、サマール島方面に上陸を企図していることは略確実と打電したが、軍令部特務班では、この日いっぱい、敵の大規模上陸があるとは考えなかった、という。敵の大艦船団がフィリピンに迫りつつあるのを諜知出来なかったのである。

ドラッグ沖にあった敵艦艇は、午後二時、第十六師団では台風避難かもしれぬと考えていたにもかかわらず、艦砲射撃を開始し、舟艇一部の兵力が午後三時三十分ドラッグ北方六軒のカトモン東岸に上陸し、地形偵察をして避退した。

大本営陸海軍部では、敵のフィリピン上陸作戦は早晚必至であり、それを十月下旬と判断して、捷一号作戦の発動に踏切り、梅津・及川両総長は上奏^(註三)して、発令裁可を願った。

2

十月十九日、朝、現地の日本陸海軍は、はじめて敵の本格的攻略部隊を発見した。

午前八時から十二時二十分までの間に、陸軍偵察機は、レイテ湾内に、空母三、特設空母四、戦艦七、巡洋艦または駆逐艦二、輸送船四〇を発見し、海軍索敵機はレイテをめざしている数群の攻略部隊を発見した。これらを合算すると、空母十数隻、輸送船約一〇〇隻に及ぶもので、レイテ方面に上陸作戦を企図していることは明らかであった。

この日、午前十一時四十分ごろから、米軍舟艇がタクロバンはじめ各地に接近し、水中障害物処理部隊を使用して、引き揚げた。

レイテの戦雲の迫ったこの十月十九日、大本営は、午後六時に台湾沖航空戦以降の綜戦果を発表した。

「我方の収めたる戦果綜合次の如し。

轟撃沈 航空母艦十一隻、戦艦二隻、巡洋艦三隻、巡洋艦若は駆逐艦一隻

撃破 航空母艦八隻、戦艦二隻、巡洋艦四隻、巡洋艦若は駆逐艦一隻、艦種不詳十三隻

その他 火焰火柱を認めたるもの十二を下らず

撃墜 百十二機（基地に於ける撃墜を含まず）

我方の損害 飛行機未帰還三百十二機」

この発表は、十月十四日の発表よりさらに誇大になっていて、フィリピン方面にこの時点で確認されている敵情と全く矛盾していた。

敵には依然として十数隻の空母があり、十七日以来熾烈な空襲を反復する航空兵力があり、艦砲射撃を加える艦隊が自在に行動しているのである。いつ上陸を決行するかは、敵の意のままであった。

連合艦隊の決戦主力としてブルネイに進出中の栗田艦隊（第一遊撃部隊）は、十月二十四日夕刻にフィリピン東方海域に進出する予定でいたが、日吉の連合艦隊司令部では栗田艦隊の敵上陸地点への突入を二十四日早朝とする案を立てていて、既に齟齬を来していた。

連合艦隊司令部では、敵攻略部隊の主力がタクロバン付近に上陸するのを二十二日乃至二十三日と判断している。栗田中將に対して、二十四日黎明時には万難を排して上陸点に突入してもらいたい、それが出来るか否かを承知したい、と問い合せた。栗田中將からの返答は遅れた。ブルネイでの給油が円滑に行なわれない事情があったのである。

機動部隊本隊（小沢艦隊）は瀬戸内海八島沖に集結し、二十日午後一時出撃を予定していた。空母「瑞鶴」に

六五機、「瑞鳳」に一七機、「千歳」に一八機、「千代田」に一六機、合計一一六機の飛行機を搭載したのが機動部隊本隊の全力であった。

艦隊が本格的作戦行動をとるとなれば、何よりも油が必要となる。連合艦隊は十月一日までに（台湾沖海戦の前までに）、配当タンカーを急速に失っていた。主として米潜水艦によって沈没させられたのである。

十月二日以降、僅かに六隻のタンカーしか持っていなかった。これでは連合艦隊の決戦出動に給油能力が追いつかない。艦隊主力の出撃を根本的に諦めてしまうか、民間船を大量に使用して、既に枯渇しはじめている内地の石油事情をさらに悪化させ、南方からの石油運搬が激減すれば、日本は戦わずして立ち枯れることになるのを敢て冒すか。

陸軍側は早くから（九月）、戦果の芳しくない海軍が乏しい石油を大量に消費することをにがにがしく思っていた。こういう記述^(註三)がある。

「今や燃料問題ハ如何ナル小細工ヲ弄スルモ、其ノ量タルヤ微々タルモノニシテ、茲ニ聯合艦隊ヲ解体シ之カ油槽船全量ヲ即時一貫輸送ニ充当スルヲ要ス。

（引用者中略）敵撃滅ノ用ヲ為サザル聯合艦隊ノ為ニ、一ヶ月七万屯ノ重油ヲ徒費セシムルノ可否ハ三歳ノ童児モ判決シ得ル所ナリ。

本件ニ関シテハ陸海兩軍務局長、兩作戰部長間ニ於テ近ク話合ヒヲ進メラルコトトセリ。」

輸送船やタンカーの被害は開戦前に十分厳密に予測し、新規造船による補填と損耗の関係には、決して楽観的予測は許されないはずのものであった。それを、日本は、損失は過小に計算し、補充能力を過大に見積って戦争に突入したため、早くも開戦翌年のガダルカナル戦末期ごろから、船舶事情が窮迫し、日に月に事情は悪化する